

## 各種台木における‘天草’の新梢および根の生長パターン

新崎正雄・比嘉 淳<sup>1)</sup>・島袋清香  
 (沖縄県農業試験場名護支場・<sup>1)</sup> 沖縄県農業試験場宮古支場)

Masao ARASAKI, Atusi HIGA and Sayaka SIMABUKURO :  
 Growth Pattern of Root and New Leaf of Citrus cv. Amakusa Various Rootstocks

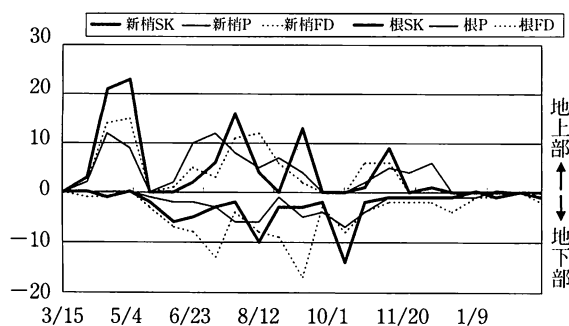
ウンシュウミカンの価格低迷により、沖縄県では中晩生カンキツの栽培が伸びつつある。その中で‘天草’は果実品質が優れており、12月出荷用品種として沖縄県でも近年栽培面積が増加している。しかし、‘天草’は生理生態特性が未解決で栽培管理技術が確立していない。そこで高品質安定生産の基礎資料とするために、台木の違いによる地上部、地下部の発生周期を調査した。

## 1. 材料および方法

名護支場内でヒリュウ台、カラタチ台、シイクワシャー台の1年生‘天草’を各台木とも5樹供試し、2000年2月下旬に根箱(60cm×18cm、深さ46cm)に定植した。根箱は両面をガラス板(ふた付き)にし、根の発生状況が観察できるようにした。着果樹は5月中旬にすべて摘果し、無着果状態で新梢および根の生長パターンを調査した。調査は、2000年3月15日から月2回、新梢および根の発生状況を達観および実測で行った。新梢の発生量は平均発芽長と樹全体の発芽割合(達観)から伸長率に数値化した。根の発生量は、ガラス板上に発生した根長をデジタルキルビメーター(小泉測機製作所)で測定した。

## 2. 結果および考察

‘天草’の新梢はヒリュウ台、カラタチ台、シイクワシャー台とも3月下旬に伸長し始め、その後春・夏を中心に3回程度大きな伸長を繰り返す。12月中旬以降は伸長はみられなかった。根は3台木とも3月下旬から伸長し始め、9月前後には最も活発に伸長し、10月中旬から2月下旬までは少量の伸長が続いた(第1図)。また、



第1図 台木別天草の新梢および根の発生周期

注) a) 新梢の発生程度は平均新梢長×樹全体の発芽割合(達観)とし、シイクワシャーの年間伸長量を100とした  
 b) 根の発生程度は根箱に発生した根長を測定し、ヒリュウの年間伸長量を100とした  
 c) 根は「-」で表示した

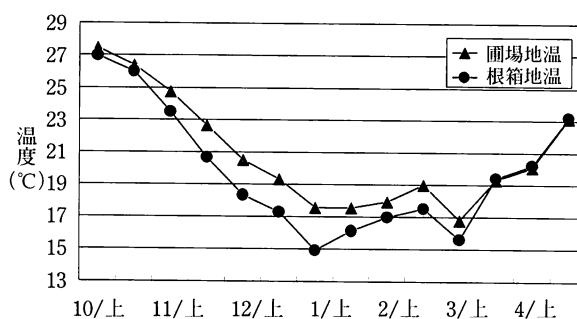
‘天草’の1年間の新梢長を実測した結果、新梢長はシイクワシャー台が最も長かった(第1表)。一方、地温の推移をみると、根箱の地温は10月から徐々に低くなり、

第1表 天草の年間新梢長(1根箱当たり)

台木名	新梢長(cm)	割合(%)
ヒリュウ	812	96
カラタチ	850	100
シイクワシャー	1,064	125

注) a) 2000年2月下旬に根箱に定植後、2001年1月25日に調査  
 b) 「割合」はカラタチを100とした場合の割合

1月中旬に15℃まで低下し、その後徐々に上昇していった。圃場地温は10月以降3月まで根箱地温より0.4~2.6℃の範囲で高く推移していることから、圃場の‘天草’は冬期でも根の発生が続いているものと考えられた(第2図)。



第2図 気温と地温の推移

注) 2000年10月~2001年4月のデータ

以上の結果から、無着果‘天草’の新梢および根の生長パターンは、3台木とも新梢は春・夏に3回程度大きな伸長をし、根は9月頃に多く伸長し、2月まで伸長は続いていた。また、台木の違いでは、新梢はシイクワシャー台が最も伸長していた。冬期の圃場地温は根箱地温よりも常に高く推移していることから、沖縄県では露地栽培の‘天草’は冬期でも根の発生が続いているものと考えられた。